

## 駒村ゼミ教授インタビュー

教授の専門分野について詳しく教えてください！

私の専門は社会政策です。社会政策というのは、年金・医療・介護などの社会保障制度や、労働政策を含む広い分野を対象にしています。たとえば、子どもや障害のある方、生活に困っている方々への福祉政策も重要なテーマです。日本は急速に高齢化が進んでおり、社会保障制度の支出はすでに GDP の 20% を大きく超えています。今後もこの分野はますます重要になっていくと思います。

最近では、環境問題と格差の関係に関心を持ち、SDGs と社会政策をつなげた研究も行っています。また、経済研究所のファイナンシャル・ジェロントロジー研究センターのセンター長も務めており、そこでは「認知機能と経済行動の関係」をテーマにした研究を進めています。これは内閣府、厚生労働省、金融庁、消費者庁と連携した国家プロジェクト（SIP）の一環で、医学部や理工学部との学際的な研究です。高齢者の認知機能の変化と経済的判断や行動との関係を科学的に分析する取り組みで、国内では非常にユニークなものです。



専門分野に対する見地を深める中で一番衝撃的だった出来事はなんですか？

私がこの分野に関心を持った原点は、実は幼少期にあります。5 歳くらいのとき、上野駅近くの松坂屋デパートの前で、傷痍軍人の方が障害を抱えながら一生懸命に楽器を演奏している姿を見かけました。国のために戦って大けがを負った方が、なぜこのような形で生計を立てなければならないのか。小さな心に強く残る出来事でした。

駒村教授の教育理念について教えてください。

私の教育理念は、3・4 年次からの学びはそれまでと全く違うということです。自分自身で「問い」を立てることが、何よりも大切だと思っています。また、経済学を軸としながらも、複眼的な視点を持ち、他分野の知見にも目を向けてほしい。学問には「セレンディピティ（偶然の発見）」もあります。ふとした出会いが思わぬ発想につながることもあります。日々の生活に好奇心を持って過ごしてほしいですね。

駒村教授の学生時代について教えてください。

私自身、高校時代は検事になりたいと思っていました。ところが経済学部に進学し、最初は気持ちの整理がつかなかったのですが、学ぶうちに経済学の面白さとその社会的意義に気づきました。研究者になるか公務員になるか、ずいぶん悩みました。でも今振り返ると、20代前半で悩むことはとても大切で、「迷うこと自体が成長の糧になる」と実感しています。

将来どのようなことをしたいと大学生時代思い描いていましたか？

大学生の頃は、社会にどう貢献できるのか、自分らしさを生かせる仕事とは何か、ということを実際に考えていました。最初から慶應の教員になるつもりだったわけではありませんでした。でも、多くの人や本、経験との出会いの中で、自然とこの場所に導かれてきたように思います。

駒村ゼミを志望する2年生に求めるものはなんですか？

駒村ゼミに関心を持ってくれている皆さんには、まず「誠実さ」を大切にしてほしいと思っています。ゼミの雰囲気は「質実剛健」。落ち着いた雰囲気の中で、真剣に学び、互いに信頼し合える関係を築いていくことを重視しています。もちろん、学生時代の思い出にも残るような活発な活動も行っています。チームで取り組む機会も多いので、協調性や責任感も大切です。

教授から見て駒村ゼミの今の印象はどういったものですか？

今のゼミは、インゼミ、夏の温泉合宿、OBOG会、学会参加などイベントも多く、やや忙しいかもしれません。ただ、これらの活動を学生たち自身がきちんとマネジメントできている、それぞれの代に応じたカラーが出ていて、とても良い形になっていると思います。ゼミも18期目を迎え、OBOGは300人以上になりました。元気なタイプの学生も、落ち着いたタイプの学生も、それぞれの持ち味を活かして活躍しています。

最後に駒村ゼミを志望する2年生に何か一言

最後に、ゼミ志望者の皆さんに一言。

ゼミというのは、単位を取るための場ではありません。先輩・同期・後輩・OBOG、

そして私自身とも、生涯つながる「仲間」をつくる場所です。私も 19 歳のときに会った恩師と、40 年近いお付き合いが続きました。皆さんにも、そんな出会いをぜひ経験してほしいと思います。

私は、学生の皆さんに「文武両道」「花も実もある」人物になってほしいと願っています。もちろん華やかさも大事ですが、それ以上に「実」を伴ってほしい。将来、組織や社会が困難に直面したときに、「〇〇さんがいれば何とかなる」と思われるような人になってください。つまり、「請われれば一差し舞える」ような準備と実力を、大学時代に培ってほしいのです。

皆さんとゼミで出会えることを、楽しみにしています。